櫃敬史「新渡戸稲造の米国留学時代における農学研究に関する実証的研究――ジョンズ・ホプキンズ大学所蔵文書の分析を中心として――」『北海道大学大学院教育学研究科紀要』第一〇一号、二〇〇七年三月、小林竜一「新渡戸稲造におけるアメリカ留学の意義――クエーカー主義と内村鑑三――」『比較文化研究』第九八号、二〇一一年九月など。

②アメリカで吸収したクエーカーの影響については、角谷晋次「新渡戸稲造とクェーカーリズム」『比較文化研究年報』第三号、一九九一年九月、寺崎宣昭「新渡戸稲造とアメリカ――新渡戸稲造のクエーカー派キリスト教精神と『アメリカ民主主義』についての覚え書き――」(1)、(2)『国学院大学栃木短期大学紀要』第三二、三四号、一九九八年三月、二〇〇〇年三月、鵜沼裕子「新渡戸稲造のアメリカ観とクエーカー主義」『聖学院大学論叢』一六巻二号、二〇〇四年三月、大山綱夫「内村鑑三と新渡戸(太田)稲造のアメリカ滞在期体験――非制度的聖職者への道とクエーカーへの道――」『キリスト教史学』第六一集、二〇〇七年七月、小林竜一「新渡戸稲造におけるアメリカ留学の意義――クエーカー主義と内村鑑三――」『比較文化研究』第九八号、二〇一一年九月など。

③アメリカン・デモクラシーの摂取については、Kazuhiro Maeshima(前嶋和弘), "Tocqueville's Democracy and Samurai: Inazo Nitobe's Attempt to Apply American Democracy to the Feudal Tradition of Japan,『敬和学園大学研究紀要』第一三号、二〇〇四年二月など。

④ウィルソンの行動・思想との比較については、奈良昂「国際連盟をめぐる新渡戸とウイルソン――革新の時代におけるアメリカの思想と政治――」『盛岡大学英語英米文学会会報』第六号、一九九五年三月などがある。

(2) 松下菊人「新渡戸稲造のアメリカ観――満州事変の時代を中心に――」『職業訓練大学校紀要』第三号、一九七四年三月(のち松下『国際人・新渡戸稲造』ニューカレント インターナショナル、一九八七年に収録)、齋藤真「草創期アメリカ研究の目的意識――新渡戸稲造と『米国研究』――」細谷千博、斎藤真編『ワシントン体制と日米関係』(東京大学出版会、一九七八年)所収、佐々木篁『アメリカの新渡戸稲造――「太平洋の橋」取材記――』(岩手放送企画・編集、熊谷印刷出版部発行、一九八五年)、奈良昂「新渡戸稲造におけるアメリカ文化の受容」『比較文化研究年報』第三号、一九九一年九月、佐々木篁「新渡戸稲造における『アメリカ』と『日本』、あるいは『西洋』と『東洋』」『比較文化研究年報』第三号、一九九一年九月、阿川尚之「本で読み解く日本人のアメリカ観――国際人新渡戸稲造とアメリカ――」『外交フォーラム』一九九八年八・九月合併号(通巻第一二一号)、一九九八年九月(のち阿川『アメリカが見つかりましたか――戦前篇――』都市出版、一九九八年に収録)、三輪公忠『隠されたペリーの「白旗」――日米関係のイメージ論的・精神史的研究――』(Sophia University Press 上智大学、一九九九年)、三輪公忠「ソフト・パワー、ハード・パワー――日露戦争前後のアメリカの対日イメージと日本人の自己イメージ、セオドア・ルーズヴェルト、マハン、朝河貫一、新渡戸稲造を中心に――」『軍事史学』四〇巻二・三合併号(通巻第一五八・一五九合併号)、二〇〇四年十二月、小倉和夫「新渡戸稲造の見たアメリカ」『新渡戸稲造研究』第一五号、二〇〇六年九月、拙稿「新渡戸稲造――アメリカ、中国との格闘――」『新日本学』第二六号、二〇一二年九月、谷口真紀「晩年の新渡戸稲造とアメリカ――満州事変後のアメリカ講演をめぐる評価――」『アメリカ研究』第四七号、二〇一三年三月(のち加筆修正の上、谷口『太平洋の航海者――新渡戸稲造の信仰と実践――』関西学院大学出版会、二〇一五年に収録)などがある。このうち拙稿「新渡戸稲造――アメリカ、中国との格闘――」は学術論文ではなく、脚注を付けないごく短いエッセイであって、本稿において改めて詳しく考察を加えるものである。そのほかに亀井俊介編『日本人のアメリカ論』(研究社出版、一九七七年)、平川祐弘『西欧の衝撃と日本』(講談社学術文庫、一九八五年)などが新渡戸のアメリカ観を紹介している。さらに以上①から⑤の範疇に入らないものとして、津曲裕次「アメリカ・エルウィン知的障害者センターと日本人――田中不二麿、新渡戸稲造、内村鑑三、小西信八、石井筆子・亮一――」『純心人文研究』第一九号、二〇一三年二月がある。そ

の中で、ハーヴァード大学医学部医学史図書館「カーリン文書」に所蔵されたアメリカ留学中の新渡戸の書簡一通が紹介されている。

またとくにアメリカ観に焦点を絞った研究ではないが、本稿を執筆する上で、長年新渡戸研究に力を注いでこられた佐藤全弘氏の『新渡戸稲造――生涯と思想――』（キリスト教図書出版社、一九八〇年）、新渡戸の生涯の全体像をはじめて明らかにした草原克豪氏の『新渡戸稲造 一八六二―一九三三――我、太平洋の橋とならん――』（藤原書店、二〇一二年）が参考となった。さらに佐藤全弘、藤井茂共著『新渡戸稲造事典』（教文館、二〇一三年）は詳細な年譜を収録した新渡戸研究の必読書である。

（3） 新渡戸稲造全集編集委員会編『新渡戸稲造全集』第一―二三巻・別巻二（教文館、一九六九―七〇年、一九八五―八七年、二〇〇一年）。以下『全集』と略す。

（4） 東京女子大学図書館新渡戸稲造記念文庫の所蔵書については、東京女子大学図書館編集・発行『東京女子大学図書館所蔵 新渡戸稲造記念文庫目録』（一九九二年）を参照のこと。

（5） 「デモクラシーの主張する平等論の本旨」『実業之日本』一九一九年三月十五日『全集』四巻、五三二頁。

（6） 『帰雁の蘆』一九〇七年十二月『全集』六巻、一三三頁。

（7） 亀井俊介『自由の聖地――日本人のアメリカ――』（研究社出版、一九七八年）など亀井氏の一連の研究を参照のこと。

（8） 『帰雁の蘆』一九〇七年十二月『全集』六巻、二五頁。このとき新渡戸は夢中のあまり船からいつの間にか陸に上がってしまい、税関の鉄門前で注意されてはじめて気がついたという。

（9） 同右、二一―二二頁。

（10） 同右、二二頁。

（11） 三輪『隠されたペリーの「白旗」』四一―四三頁。

（12） 和泉「札幌農学校初期における農業経済学の形成過程に関する研究」八七―九〇頁。新渡戸の履修の実態をはじめて詳細に明らかにした注目すべき労作である。また歴史・政治学ゼミナールにおける新渡戸の報告について解明した同氏の「新渡戸稲造のアメリカ留学と農政学研究」もあわせて参照のこと。さらに Furuya, "Nitobe Inazo in Baltimore" は新渡戸の履修状況に加えてクエーカーとしての宗教生活面も検証しており、大いに参考となる。以上三つの論考はいずれもジョンズ・ホプキンス大学の所蔵資料を用いた貴重な研究である。

（13） 和泉「札幌農学校初期における農業経済学の形成過程に関する研究」九三―九四頁。

（14） 『読書と人生』（一九二九、三〇年頃の早稲田大学での課外講義をまとめたもの、出版は一九三六年二月）『全集』一一巻、四二三―四三四頁。

（15） 『内観外望』（一九二八年以降約三年間の早稲田大学での講演をまとめたもの、出版は一九三三年五月）『全集』六巻、二四一―二四二頁。

（16） 『読書と人生』（一九二九、三〇年頃）『全集』一一巻、四三三頁。『内観外望』（一九二八年以降約三年間）『全集』六巻、二三九―二四〇頁。

（17） 新渡戸はイリーからマルクス主義への批判も聞いたという。イリーは、マルキシズムは紙の上で考えた学説である、現実の実際というものを離れて論じたものであるため、純理としては非常に巧みなものであるが、まったくリアリティを没却した説である、と批評したと新渡戸は回想している（『内観外望』『全集』六巻、二三五―二三六頁）。

（18） 『読書と人生』（一九二九、三〇年頃）『全集』六巻、二三九―二四〇頁。

（19） 『帰雁の蘆』一九〇七年十二月『全集』六巻、一三二―一三四頁。

（20） 同右、一三八―一三九頁。

（21） 「日本人のクェーカー観」（一九二六年十二月十四日、ジュネーヴ大学での講演）『全集』一九巻、四一一―四一二頁。

（22） この点については先にあげた和泉庫四郎氏、古矢旬氏の研究を参照のこと。

（23） Furuya, "Nitobe Inazo in Baltimore," 53.

（24） Ibid., 54. 和泉「新渡戸稲造のアメリカ留学と農政学研究」八六―八七頁。

（25） 『帰雁の蘆』一九〇七年十二月『全集』六巻、八八―八九頁。

(26) 同右、五一―五三頁。
(27) 同右、一二六―一二七頁。
(28) 『自警』一九一六年十月『全集』七巻、五五七―五五九頁。新渡戸はイギリスのリバプールでも類似の体験をしたことがあった。「デモクラシーの根柢的意義」『実業之日本』一九一九年一月一日『全集』四巻、四九九―五〇一頁。
(29) 『自警』一九一六年十月『全集』七巻、五五九頁。
(30) 「デモクラシーの根柢的意義」『実業之日本』一九一九年一月一日『全集』四巻、五〇四―五〇五頁。ちなみにそのように考える彼は、政治的な漸進主義を重視して暴力革命に反対し、フランス革命とそれに影響を与えたルソー（Jean-Jacques Rousseau）の『社会契約論』を自由と民主主義を誤解濫用したものとして強く批判した。それとともにマルクス主義について、現在の日本でそれが実行されるならばフランス革命以上の惨毒をわが国家および国民に及ぼすであろうと警告した。国体、私有財産制を破壊して人間の幸福が生まれるとは信じられない、かえって人間が堕落すると新渡戸はいう（「デモクラシーの要素」『実業之日本』一九一九年二月一日『全集』四巻、五〇八―五一四頁。『内観外望』（一九二八年以降約三年間）『全集』六巻、一九五―一九六、二三二頁）。

新渡戸は人の思想はあくまで尊重されるべきであり、官憲がそれを圧迫するのは間違いであって、マルクス主義は学理として大いに研究されるべきだと考えていた。しかしそれを実行に移すことには異議を唱えたのである。そのため一九二八（昭和三）年の三・一五事件に際しては、国家の根柢を覆すような行動を取り締まるのは、普通にいう圧迫とは質を異にし、もっとも至当な国家権力の行使であるとしてそれを肯定した（「共産党事件に対する感想」『実業之日本』一九二八年五月一日『全集』四巻、五五〇、五四五頁。『内観外望』『全集』六巻、二五五頁）。

そうした彼の意見の有力な根拠となっていたのはエドマンド・バーク（Edmund Burke）の『フランス革命の省察』（*Reflections on the Revolution in France*）であった。新渡戸は同書を非常に高く評価しており、政治学を学ぶ者はこれを一読二読三読すべきである、政治思想の根本を養うにはバークに限るとまで述べている。新渡戸によれば、フランス革命やロシア革命は宗教を退け、理屈だけでやろうとしたから妙なことになった。しかしバークによれば、国を治めるには伝統やその国民が信じている昔ばなし、迷信のたぐいも無視できず、イギリスでは理屈に合わないような王道が国を治める根底になっている。日本でも二千年の歴史、国体が続いていて、大嘗祭など二千年前の風俗習慣が今日でも伝えられており、西洋の新しいものを取り入れながらも、根底において古から変わらない心棒が一貫している。つまり国というものは古くから蓄積されたものの集積体であり、理屈だけで治めることができないものであるが、バークを読むと、そうした国を治めるとはどういうことかという点がわかってくると新渡戸はいう（『内観外望』『全集』六巻、二〇〇―二〇一、二三〇、二七六―二七八、二八五頁）。このようにバークから影響を受けた新渡戸の考え方は、今日でいう保守的自由主義の立場に近いものであるといえよう。

(31) 「自由国民の底力」『実業之日本』一九一九年二月十五日『全集』四巻、五二一―五二二頁。
(32) 『偉人群像』（一九二九年以来『大阪毎日新聞』『東京日日新聞』で連載されたもの、出版は一九三一年十一月）『全集』五巻、四九二頁。
(33) 「人物崇拝」（一九〇七年二月。『随想録』同年八月に収録されたもの）『全集』五巻、一四六―一四七頁。新渡戸がこの英語の一節をよく揮毫したことも知られている（佐藤、藤井『新渡戸稲造事典』二七五頁）。
(34) 『一日一言』一九一五年一月『全集』八巻、四二〇頁。『自警』一九一六年十月『全集』七巻、六四二頁、六五二頁。のちにジャンヌ・ダルク（Jeanne d'Arc; Joan of Arc）も新渡戸の崇拝の対象に加えられたことはよく知られているとおりである。後年彼は、自分は「リンコルン崇拝者で、私の家の神棚にはキリストとソクラテスとリンコルン、それに十二三年前から女の神としてジャンダーク、この四人が祀ってある」と述べている。『内観外望』（一九二八年以降約三年間）『全集』六巻、四六一頁。
(35) Ernest Foster, *Abraham Lincoln* (London; Paris; New York;

Melbourne: Cassell & Co., 1890), 東京女子大学図書館新渡戸稲造記念文庫所蔵。表紙見返しに「Dr. Inazo Nitobe — With kind regards Arthur A. Brigham Sapporo May 6th 1892」の署名があり、当時札幌農学校で新渡戸の同僚であったアーサー・アンバー（Amber）・ブリガムからの献呈本であることがわかる。

（36） Ibid., 31.

（37） Ibid., 92.

（38） Ibid., 94.

（39） C. S. Beardslee, *Abraham Lincoln's Cardinal Traits: A Study in Ethics* (Boston: Richard G. Badger The Gorham Press; Toronto: The Copp Clark Co., Copyright 1914), 東京女子大学図書館新渡戸稲造記念文庫所蔵。

（40） Ibid., 38. またこの演説全文を掲げたページにおいては、「愛情をこめてわれわれが希望する――熱烈に祈願する――のは、この戦争という強大な天罰がすみやかに過ぎ去ることである」の右余白にサイドラインを引き、「誰にも悪意を抱かず、すべての人に慈愛をもって接し、神がわれわれに見るようにと与えたその正義を固く信じ」の左余白に「○」を記している。Ibid., 243-244.

（41） Ibid., 43, 44, 52.

（42） 佐藤、藤井『新渡戸稲造事典』五〇六頁。

（43） Francis Fisher Browne, *The Every-Day Life of Abraham Lincoln* (Chicago: Browne & Howell Co., 1914), 東京女子大学図書館新渡戸稲造記念文庫所蔵。

（44） Carl Crow, *America and the Philippines* (Garden City, New York: Doubleday, page & Co., 1914), 北海道大学附属図書館新渡戸稲造文庫所蔵。

（45） Ibid., 31.

（46） Ibid., 54, 57.

（47） Ibid., 228.

（48） 『帰雁の蘆』一九〇七年十二月『全集』六巻、二七―三〇頁。

（49） 同右、三五頁。

（50） 同右、七二―七三頁。

（51） 川西実三「新渡戸先生に関する追憶」『全集』別巻、二四〇頁。

（52） 秦郁彦『太平洋国際関係史――日米および日露危機の系譜一九〇〇～一九三五――』（福村出版、一九七二年）、六七―七〇頁。

（53） 拙著『近代日本人のアメリカ観――日露戦争以後を中心に――』（慶應義塾大学出版会、一九九九年）、五二―五三頁。

（54） 秦『太平洋国際関係史』の第四章「一九一〇年代の日米危機」を参照のこと。

（55） 拙著『近代日本人のアメリカ観』五四―五五頁。

（56） 新渡戸は一九一一年から一二年の一年間、第一回日米交換教授として、六つの大学などで合計一六六回、のべ四万人の聴衆に講演を行なったが、そのときの講演をまとめたものが『日本国民――その国土、民衆、生活――合衆国との関係をとくに考慮して』である（佐藤全弘「解説」『全集』一七巻、六〇八頁）。

（57） 『日本国民』『全集』一七巻、二五八―二六五頁。

（58） 新渡戸は日本移民排斥運動の根底に人種偏見があることを十分認識していた。しかしながらその一方で「米国に人種の偏見があると罵る日本人は反つて支那人を排し、朝鮮人を斥けて居る。日本人〔の方〕が西洋人よりも余程他国人に偏見が多い、西洋人には日本人を歓迎する者が甚だ多いが、日本人で西洋人を朋友とする者が何人あるか、外人を見ると、異人だと罵る」と戒めている。『人生雑感』（およそ一九〇六年から一三年頃までの間にフレンド派の集会で述べたもの、出版は一九一五年二月）『全集』一〇巻、六五頁。つまりアメリカ人を一方的に批判するようなことはしなかった。

（59） この個所は読みやすさを考慮して若干省略をしつつ現代的な文体に改めた。『日本国民』『全集』一七巻、二六七―二六八頁。

（60） 同右、二九七頁。この部分は一九一一年九月、ルランド・スタンフォー

ド・ジュニア大学で講演されたものである。

(61) 同右、一七頁。

(62) 同右、二三頁。

(63) 同右、三一頁。

(64) Thomas F. Millard, *The New Far East: An Examination into the New Position of Japan and her Influence upon the Solution of the Far Eastern Question, with Special Reference to the Interests of America and the Future of the Chinese Empire* (New York: Charles Scribner's Sons, 1906), 東京女子大学図書館新渡戸稲造記念文庫所蔵。最終頁（三〇五頁）に「On board the Tainan. VII. 13. 1906」と記されており、新渡戸が一九〇六年七月十三日、台湾への航海中、台南丸船上で読了したことがわかる。

(65) Ibid., 28. サイドラインがある。

(66) Ibid., 129, 93.

(67) Ibid., 92.

(68) Ibid., 123.

(69) Ibid., 112.

(70) Ibid., 252, 296, 140.

(71) Ibid., 裏表紙見返しの書き込みである。

(72) Lothrop Stoddard, *The Rising Tide of Color against White World-Supremacy* (London: Chapman and Hall, 1922), 東京女子大学図書館新渡戸稲造記念文庫所蔵。最終頁（三一〇頁）に「2. 7. 23」と記されており、新渡戸が一九二三年二月七日に読了したことがわかる。なお同書の日本語訳として、ロスロップ・スタッダード著、長瀬鳳輔訳『有色人種の勃興』（政教社、一九二一年十一月）がある。

(73) Ibid., Madison Grant, "Introduction," xxx-xxxi.

(74) Ibid., 30-31.

(75) Ibid., 50-53.

(76) Ibid., 301, 165 , 254, 258.

(77) Ibid., 264, 270. なお新渡戸はやはり人種主義者の古典的な例として有名なフランス人アルテュール・ド・ゴビノー（Joseph Arthur Comte de Gobineau）の『諸人種の不平等に関する試論』英訳版（*The Inequlity of Human Races*）も読んでいる。Arthur de Gobineau, *The Inequality of Human Races*, trans. Adrian Collins (London: William Heinemann, 1915), 東京女子大学図書館新渡戸稲造記念文庫所蔵。最終頁（二一二頁）に「1. 23. 1917」と記されており、新渡戸が一九一七年一月二十三日に読了したことがわかる。

この『諸人種の不平等に関する試論』はもともと一八五三年から五五年にかけてフランスで全四巻本として刊行され、西洋における「科学的レイシズム」の初期の代表例、レイシズムの発展と「人種」の理論化を理解する上で欠かせない重要な一次資料とされる（木村浩二「純潔・人種混淆・アメリカ――ゴビノーの『諸人種の不平等に関する試論』――」『関東学院大学文学部紀要』第一二三号、二〇一一年十二月、二頁）。全体で六部からなり、そのうち第一部が理論的な根幹部分で、第二部以下で全文明史がたどられるという構成になっている。それを貫く同書の基本テーゼは「文明の衰退は人種の混血によってもたらされる」というものであった（長谷川一年「アルチュール・ド・ゴビノーの人種哲学（一）――『人種不平等論』を中心に――」『同志社法学』五二巻四号、二〇〇〇年十一月、一二一、一二三頁）。新渡戸が読んだ英語版は同書の第一部のみを翻訳したもので、第二から第六部までは含まれていない。

同書において著者のゴビノーは、二つの完全に異質な人種に由来する文明は表面においては接触できても、決して合体はしないし、一方が他方をつねに締め出すとしているが、新渡戸はそこに「?」と記している。さらにゴビノーが異なる人種、文化間の敵対は歴史が明瞭に証明していると述べると、やはり「?」と書き込んでいる（Ibid., 174, 179）。さらに二つの国家や民族が接触した場合、一方の言語が退くことになる、たとえば一三世紀からフランスのゲルマン語方言はローマ語にその基礎を明け渡し、ケルト語もイタリア人の入植者の前に後退しなければならなかったとする記述に対して、新渡戸は「Far fr[om] it!! Think of Chinese words in our

language.」（そんなことはない!! わが言語における中国語の語彙を考えよ）と反論を加えている（Ibid., 189）。人種、民族間の相違を強調するゴビノーの考え方は新渡戸のそれと相容れようもなかった。

(78) Stoddard, *The Rising Tide of Color against White World-Supremacy*, 308.

(79) 『内観外望』一九三三年五月、『全集』六巻、三八〇—三八一頁。

(80) 『日本文化の講義 —— 日本国民とその文化の発達に関する概説 ——』（一九三二年十月五日から十二月二日までのアメリカ加州大学での講義を集めたもので、出版は一九三六年。引用個所は一九三二年十一月二十八日に述べられたもの）『全集』一九巻、三二六頁。

(81) 『内観外望』一九三三年五月『全集』六巻、三八一頁。「米国移民法案修正の報を聞きて」『実業之日本』一九三〇年六月十五日『全集』四巻、五六四—五六五頁。

(82) 同右『全集』四巻、五六五—五六六頁。

(83) 同右、五六六頁。

(84) 『内観外望』一九三三年五月『全集』六巻、三八一頁。

(85) 同右、三九九—四〇一頁。

(86) 「米国移民法案修正の報を聞きて」『実業之日本』一九三〇年六月十五日『全集』四巻、五七一—五七二頁。

(87) 「編集余録」英文大阪毎日・東京日日新聞一九三一年八月十一日『全集』二〇巻、三二六頁。

(88) 「米国移民法案修正の報を聞きて」『実業之日本』一九三〇年六月十五日『全集』四巻、五六七—五六八頁。

(89) 同右、五六六頁。

(90) 牧野伸顕『回顧録』（中公文庫、一九八七年再版）、九三—九五頁。

(91) 幣原喜重郎『外交五十年』（中公文庫、一九八九年第三版）、四八—五一頁。

(92) 『日本文化の講義』（引用個所は一九三二年十一月二十八日）『全集』一九巻、三二七頁。

(93) 『日本文化の講義』（引用個所は一九三二年、ウィリアムズタウンの政治研究所での講演）『全集』一九巻、三七九—三八〇頁。

(94) 『日本文化の講義』（一九三二年十一月二十八日）『全集』一九巻、三一一頁。

(95) John S. Hoyland, *The Race Problem and the Teaching of Jesus Christ* (London: The Religious Tract Society, [1925]). 東京女子大学図書館新渡戸稲造記念文庫所蔵。

(96) Ibid., 26. アンダーラインと「✓」の書き込みがある。

(97) Ibid., 45.「タスマニア」の文字にアンダーラインが記されている。

(98) Ibid., 32. サイドラインがある。

(99) ただし著者のホイランドは人種の違いは意識しており、そこに新渡戸は疑問を示している。たとえば、各民族は基本的な概念においてかなり違うはずだとした個所には「?」、民族ごとに義務の観念、名誉の感覚、正と不正の判断などは異なるとした部分には「in degree」（程度問題だ）として疑問を呈している（Ibid., 57–59）。

(100) Ibid., 109. アンダーラインと余白に「〇」のマークが記されている。

(101) Ibid., 125. 全体にサイドライン、「強力に確信すること」にアンダーラインが引かれている。

(102) Ibid., 195.

【付記】 本稿の作成にあたっては平成二十九年度・拓殖大学人文科学研究所研究助成金を活用させて頂いた。ここに記して感謝の意を表したい。